

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1	確かな学力の確立と規律ある学校生活・家庭生活定着の推進	(1) 魅力ある授業の展開・日常的な課題を工夫するなど学習意欲を喚起するとともに、基礎学力の定着を図る。	① 学習時間の調査を通して、自ら見通しを持って家庭学習に取り組む態度を育て、学習意欲の向上を図る。	家庭学習時間が学年＋1時間以上である生徒が A：50%以上 B：40%以上 C：30%以上 D：30%未満	<b>達成度：D</b>  家庭学習調査の方式を変更した11月9日からの1月末日までの調査の結果では、1年で2時間以上17.8% 2年で3時間以上10.4% 3年で4時間以上22.9% 全校で目標達成は16.7%であった。	従来は1月ごとの調査であり、かつ職員全員に周知されているものではなかった。毎日の授業の予習や復習を前提とする家庭学習は学力向上の要になるものである。これを前提に体制を整え、11月9日より、一人一人の毎日の学習時間をその日のうちに副担任が入力し、更に全職員がいつでも参照できるようにした。調査の結果、 ・学年・クラスによって、また時期によっても学習時間に大きな開きが生じている。 特に定期試験がある前は家庭学習が大きく増え、例えば1年では60%を超える達成度を示している。 ・3年生では、上級学校受験を控えた生徒の学習時間が増えており、目標の数値を大幅に上回るクラス（達成率70%以上）も出てきた。  これらのデータから、具体的な目標があるときには生徒の家庭学習時間が大きく増え、無いときには大きく下がることが示され、教員にも共通認識された。今後は、単に学習時間を調査するのみで終わることなく、示されたデータを元に、家庭学習のモデルケースを示したり、自身のキャリアデザインを踏まえた家庭学習の在り方を考えさせる必要がある。
		(2) 45分授業の導入に伴う教授内容・方法の確立を図る。	② 本校における教授内容・方法を研究し確立していくために、まずは1年生に対して本校の学力スタンダードを作成する。	本校の使命に応じた1学年の学力スタンダードが作成されたと思う教員の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	<b>達成度：C</b>  12月での教員への調査では、肯定的回答は、75.9%であった。	最初の段階では、教科により「育む資質・能力」が不明確であったり、生徒の具体的な活動内容にまで考慮されて記されていないなどもあったが、度重なる協議によりかなり改善されたものになってきた。ただ、各論において個々の教員により、生徒の見方・力を入れたい部分が微妙に異なるなどがあり、全員が満足できるものとはならなかったようである。来年・再来年とさらに協議を重ね、ほぼ全員の教員が満足できるスタンダードに仕上げていきたい。
		(3) 朝学習・授業・家庭学習・補習等の体系化を図る。	③ 授業をベースとして、生徒の学力や理解度に応じて朝自習、週末課題、補習等を体系的に行う。	親子ともに学習意欲が向上し学力が定着したと思う割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	<b>達成度：C</b>  12月のアンケートにおいて肯定的な回答は、生徒63.2%、保護者58.3%であった。	7月のアンケートより、生徒・保護者とも若干の増加があったが、目標値には及ばなかった。 家庭での学習時間が明らかに不足していることや、模擬試験などにおける志望校判定に十分な結果が出ていないことなど、学力のアップが実感されていないようである。 学力スタンダードをより充実させ、教員自ら授業改善に努めることはもとより、生徒に与える学習課題の見直し、家庭学習を含めた一連の学習体系の見直し等を進め、生徒も保護者も学力の向上が実感できるようシステム化していきたい。
学校関係者評価委員会の評価				<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒に同じ課題を与えてもかかる時間には個人差があるのではないかと、学習時間だけで達成度を測れるのか疑問である。</li> <li>・進学校としてどこを目指すのか。「進学」とこだわるのは伏見高校の良さにつながっているのか疑問である。</li> </ul>		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針				<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習時間だけではなく、「生徒による授業評価」等により個々の授業における学習意欲などの調査も行っており、総合的に判断している。外部に対しては学習時間がわかりやすい指標であり、昨年度も指標としている。昨年度までは1週間単位で記録をとっていたが、今年度は11月中旬より毎日の記録をとり、更に教員全員で共有できる仕組みを構築した。生徒の家庭学習の様子をリアルタイムで把握できる利点があり、各教科での対策を打ち出しやすいため、今後も活用していく。</li> <li>・本年度の卒業生から普通科のみの募集になっており、普通高校として上級学校への進学実績を上げていくのは本校の使命である。特に生徒・保護者からの希望の多い、国公立を含めた県内の大学への進学保証を今後も継続していきたい。</li> </ul>		

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2	上級学校を目指す普通高校としてより高い志を実現できる進路指導の推進	(1) 将来を見据えたキャリア教育を押し進め、個に応じた進路指導を実践する。	① 学年段階に応じたキャリア教育を実施し、面談を行う中で進路目標を考えさせるよう指導する。	本校の行うキャリア教育や面談指導が進路を考えるうえで参考になったとする生徒の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	<b>達成度：D</b>  12月のアンケートにおいて肯定的な回答は、生徒67.5%であった。	生徒の肯定的意見が70%を下回っている。コース制があった時代のノウハウを継承した、1・2年生の「伏見プラス」（総合的な学習の時間）が本校のキャリア教育の基盤にもなっているのだが、生徒の自覚に必ずしも訴えかけるものになっていないのかもしれない。今後その意義を強く意識させ、「合同進路ガイダンス」とも絡めて主体的に取り組みせていく必要がある。 また、生徒に自ら考えさせる面談指導の不足も否めない。生徒一人一人に配布した「進路ノート」も面談指導に活用しながら、さらには的確な進路情報の提供を含め、進路目標を具体的に持てるよう改善していきたい。
		(2) 普通科高校として大学への進学指導を積極的に推進する。	② 大学入試センター試験を目標とする生徒が増えるよう指導する。	センター試験受験者が3年生の A：80% (220人) 以上 B：70% (190人) 以上 C：60% (160人) 以上 D：60% (160人) 未満	<b>達成度：B</b>  大学入試センター試験の出願者は、190名であった。	昨年度よりも増加した。大学入試センター利用の私大入試への出願も増加している。 しかしながら、受験教科が5教科に及ばない生徒も多くみられる。次年度は大学入試センター受験に向けての対策、受験後の2次受験対策を押し進め、センター出願教科数の増加とともに、国公立大学への出願に利用できるような受験体制を整えていく。
			③ 推薦入試ばかりでなく、個別学力試験で合格するよう指導する。	個別学力試験で国公立大学への出願数が A：70人以上 B：60人以上 C：50人以上 D：50人未満	<b>達成度：D</b>  国公立大学個別学力試験出願者は、32名であった。	昨年度より微増。5教科8科目または7科目を最後まで粘り強く学習させるための教員間の意思統一が不可欠である。次年度は、10月までは5教科の模試受験を追求させるとともに保護者への国公立大学入試のシステムの周知を年度当初に行いたい。
		(3) 3年間を見通した計画の中で、高い志を実現できる進路システムを確立する。	④ 高い志を実現できるよう、学年段階に応じた進路システムの構築を図っていく。	高い志を実現できるよう、学年段階に応じた進路システムの構築が図られていると答える教員の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	<b>達成度：D</b>  12月のアンケートにおいて肯定的な回答は、61.1%であった。	学校文化としての進路指導の確立が急務であるが、学年担任団や保護者との連携を含め地道に取り組む必要がある。 今年度は全学年の生徒に「進路ノート」を配布することで一歩踏み出したが、利用が進んでいるとはいえない状況である。 次年度は、生徒にも教員にも活用しやすい「進路ノート」にすべく改訂するとともに、利用方法の徹底を進めていくことで、本校独自の進路指導システムを前進させなければならない。
学校関係者評価委員会の評価				<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学入試センター試験受験者も国公立受験希望者も増加していて普通科高校としての学校の努力がみえる。今後の実績につながることを期待している。</li> <li>・保護者は進路について分からないことが多い。特に大学入試のシステムなどもっとわかるように示してほしい。</li> <li>・進路が早く決まった3年生も怠けずに勉学に励み級友と一緒に大学入試センター試験に臨んでいた。伏見高生の良い点だと感心した。</li> <li>・社会に出て働きながら資格を取る時になって学力や学歴の重要性を感じるものである。高校生のうちに情報を与え、しっかりと目標を持たせてほしい。</li> </ul>		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策				<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な志望を持って入学してくる生徒には1年次からのキャリア教育が重要。本校では、総合的な学習の時間に、コース制時代からノウハウを蓄積してきた体験型学習を取り入れた「伏見プラスプロジェクト」を実施する等して、進路実現に努めている。</li> <li>・9月の合同進路ガイダンスに約100名の保護者が参加し、進路について良く理解できたと言って頂いた。次年度も広報に努めたい。</li> <li>・今年度新たに、進路実現に向けた具体的な情報等を記載した「進路ノート」を作成し配布した。今後は中身をさらに充実して活用していきたい。</li> </ul>		

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3	誠実で品位ある人間性を育む	(1) 時間を守る等、基本的な生活習慣の確立を図る。	① 10分前登校など各学年ごとに遅刻を減少させる取組を実施する。	遅刻延べ人数が前年度と比較して A：20%以上減少した B：10%以上減少した C：10%未満の減少であった D：増加した	<b>達成度：D</b> 4月から1月までの遅刻者の延べ数は、 1年 76人（H26は238人） 2年411人（H26は303人） 3年391人（H26は281人） 計 878人（H26は822人） で前年比107%で、増加した。	4月から7月まででは前年比119%であったので、増加率はわずかに減ってはいるが、一部の生徒の遅刻の急激な増加を止めることができなかった。 指導の結果、学年が上がると次第に基本的な生活習慣が定着し遅刻が減っていくことが理想であるが、実際には、1年生の遅刻が一番少ない。 時間に対する考え方は学習意欲と関係しているようである。基本的な生活習慣の大切さをショートホームルーム等をおして繰り返し伝え認識させ、実践する行動力を身に付けさせ時間に対する自己管理の徹底を図る必要がある。また遅刻が連続したら、すばやく個別に保護者の強力を得ながら指導することも大事である。
		(2) ボランティア活動に積極的に参加する意識を醸成する。	② ボランティアの意義や啓発の機会を通して、生徒の意識を向上させる。	ボランティア活動に参加した生徒数の延べ人数が A：70%（610人）以上 B：60%（520人）以上 C：50%（430人）以上 D：50%（430人）未満	<b>達成度：A</b> 1年間でボランティア活動に参加した生徒は、 81.4%（701名）であった。	目標値Bを大きく上回った。 この要因としては、昨年度同様の活動に加えて、「社会と関わる土曜学習推進事業」の活動が挙げられる。来年度は、より「社会と関わる土曜学習推進事業」を充実させ、目標値をA：80%（690人）以上、B：70%（610人）以上とすることを検討したい。 特に「わくわく伏見体験」においては、今年度の反省を活かし、公民館や小学校との連携を密にとりながら、準備を早めにし、生徒が参加しやすい環境作りに心がける。また、公民館の文化祭りにも各部活動や生徒に積極的に働きかけ、多くのボランティアを取り込みたい。
学校関係者評価委員会の評価				<ul style="list-style-type: none"> <li>遅刻数やボランティア参加数は、延べ人数ではなく実数で評価すべきではないか。</li> <li>伏見高校のボランティア活動は米泉校下では評判がよい。続けていってほしい。</li> <li>P T A の広報誌も作成しているようなので、良い活動をもっとPRしていった方がいいのではないか。</li> </ul>		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針				<ul style="list-style-type: none"> <li>遅刻数やボランティア参加数の延べ人数は、昨年度までの比較からそのままの判断基準としている。来年度の判断基準については今後検討したい。</li> <li>ボランティア活動は元々盛んな本校であるが、今年度あらたな取組として、「子どもたちの笑顔のために伏見生は何ができるか」をテーマに、生徒自らが企画する能動的なボランティア活動「みんなで楽しもう！わくわく伏見体験！」を計画・実施した。招いた地域の小学生も本校から参加した生徒も反応がよく、来年度も継続していきたい。</li> <li>地域の方とは主にボランティア活動を通じて直に接しているが、ことある事に本校のPRにも努めていきたい。</li> </ul>		